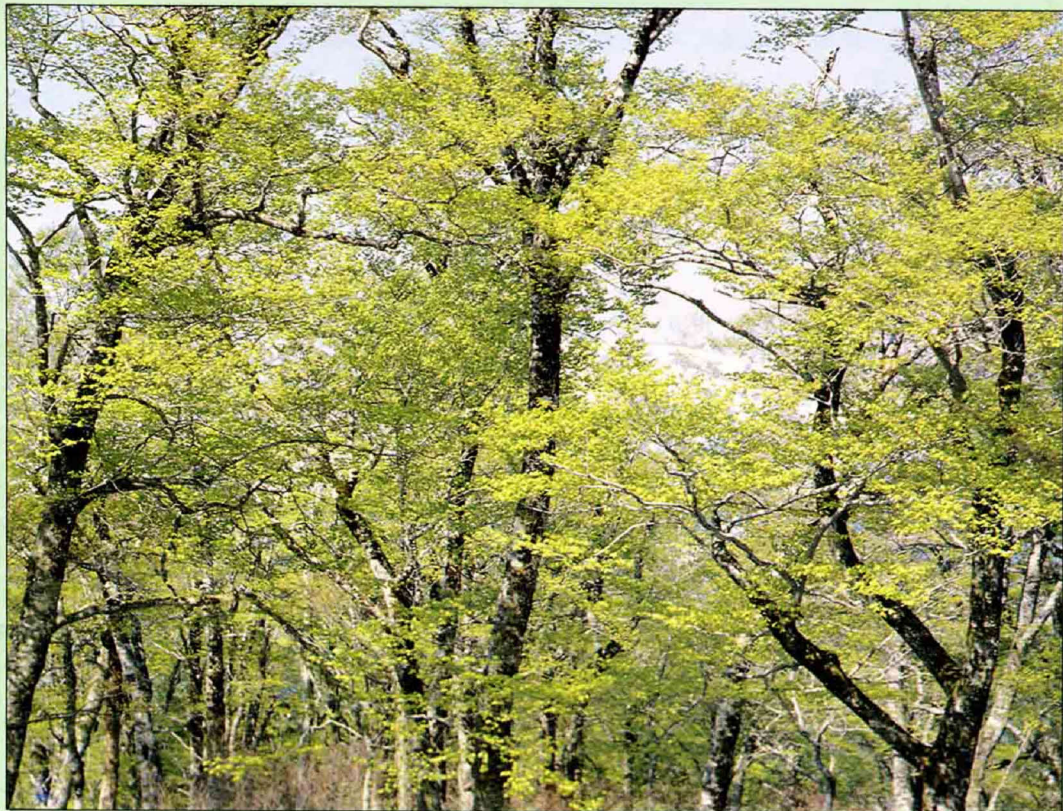


白山の自然誌 2

ブナ林の自然



石川県白山自然保護センター

はじめに

白山地域は全国的にみても原生自然のよく残された数少ないところの一つに数えられています。その自然を代表するのが、クマ（ツキノワグマ）やカモシカ（ニホンカモシカ）、サル（ニホンザル）など大型哺乳類が多く生息すること、山腹を埋めるブナの原生林の広がり大きいことです。

落葉広葉樹であるブナは春の芽ぶき、夏の青葉、秋の紅葉と実り、冬の明るい木立ちと、四季折々に変化をみせる林をつくっています。そこでは木や草が花をつけ実を結ぶとともに、大型哺乳類から微細な土壌動物まで様々な生きものが四季を通して生活しています。

またブナは今日、家具やパルプの原料として広く利用されていますが、古くからも人間生活に深くかかわってきました。

白山の自然の構成要素としてのブナ林とそこに生きる動植物の暮らし、そしてブナ林を生活の場としてきた山麓の人々の暮らしについてこれから紹介していきます。

表紙 白山チブリ尾根のブナ原生林

裏表紙 ブナの花（バックはブナの樹皮）

ブナとブナ林

〈ブナの仲間〉

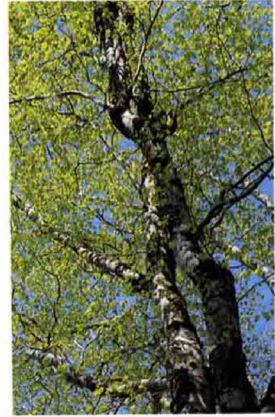
ブナは分類上ブナ科、ブナ属に属する植物です。ブナ科にはブナ属の他にコナラ属、クリ属、シイ属など6属があり、世界の温帯から亜熱帯にかけて約600種が分布しています。この仲間は森林を優占する木が多く、大木になるので材は広い用途をもっています。また果実は多くの動物の食料として重要です。

ブナ属には約10種あり、北半球の温帯に分布しています。ヨーロッパにはヨーロッパブナ (*Fagus sylvatica*)、北アメリカにはアメリカブナ (*F. grandifolia*)、小アジアからイランにはオリエントブナ (*F. orientalis*)、中国には中国ブナ (*F. longipetiolata*) が分布しています。日本にはブナ (*F. crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) が分布しています。

〈ブナ〉

ブナは山地の肥よくな土壌によく群生する落葉高木で、樹高30m、胸高直径1.7mに達するものがあります。寿命は300年～400年といわれています。樹皮はなめらかで割れ目がなく、灰白色ないし暗灰色です。しかし地衣類などがよく着生し、斑紋状となっているのがほとんどです。

花は4～5月に咲き、雌雄同株です。新枝の上部やくに2つの花をつけた雌花が1個と、下部に黄色の葯



種子 (左) と 殻斗 (右)



芽ばえ

をつけた雄花が数個ぶら下がります。雌花は受粉するとやがて穀斗かくとに包まれた実^みに成長してゆきます。

実はよくなる年と少ない年が周期的に現われ、5年前後の周期で豊作がくることが知られています。落下した実は、多くは動物に食べられたり腐ったりして、春に双葉の芽を出すのはごく一部です。そして適度の光線がさし込むなど各種の条件が整った時、はじめて成長してゆくのです。

〈ブナ林の構造〉

ブナの林の中では、ブナ以外にも多くの植物があり、高木、低木、草本などが階層構造をつくっています。それを構成する植物は地方により少しずつ異なっています。特に冬の季節風の影響で多雪地帯となる日本海側と、その影響をあまり受けない太平洋側とではちがいがみられます。中でもササ類に顕著な分布のちがいがあり、多雪地に適応したチシマザサの多い日本海側のブナ林をチシマザサーブナ群落、スズタケの多い太平洋側のブナ林をスズタケーブナ群落と呼んでいます。ササ類以外にも特に低木層にいくつかのちがいがみられます。2つの群落の構成種の一例を示すと表のようになります。白山は代表的な日本海側の植生です。



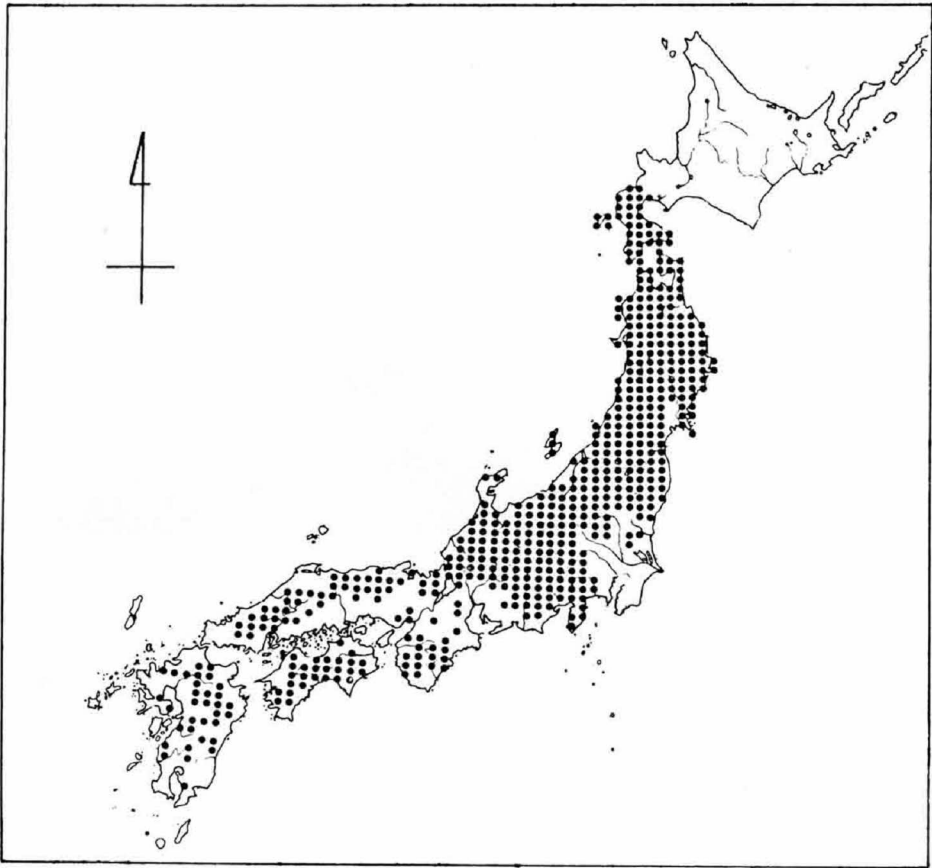
ブナ林の林内

日本海側と太平洋側のブナ林の比較

地 方	日 本 海 側	太 平 洋 側
群落名	チシマザサーブナ群落	スズタケーブナ群落
高木層	(共通種) ブナ, ミズナラ, コシアブラ, イタヤカエデ,	
	ハウチワカエデ,	コハウチワカエデ
低木層	(共通種) オオカメノキ, ヤマウルシ, コマユミ	
	チシマザサ, ヒメモチ, エゾユズリハ	スズタケ, タンナサワフタギ, シロモジ
草本層	イワウチワ, シシガシラ, シノブカグマ	コカンスゲ, イチヤクソウ, タケシマラン

日本のブナ林の分布

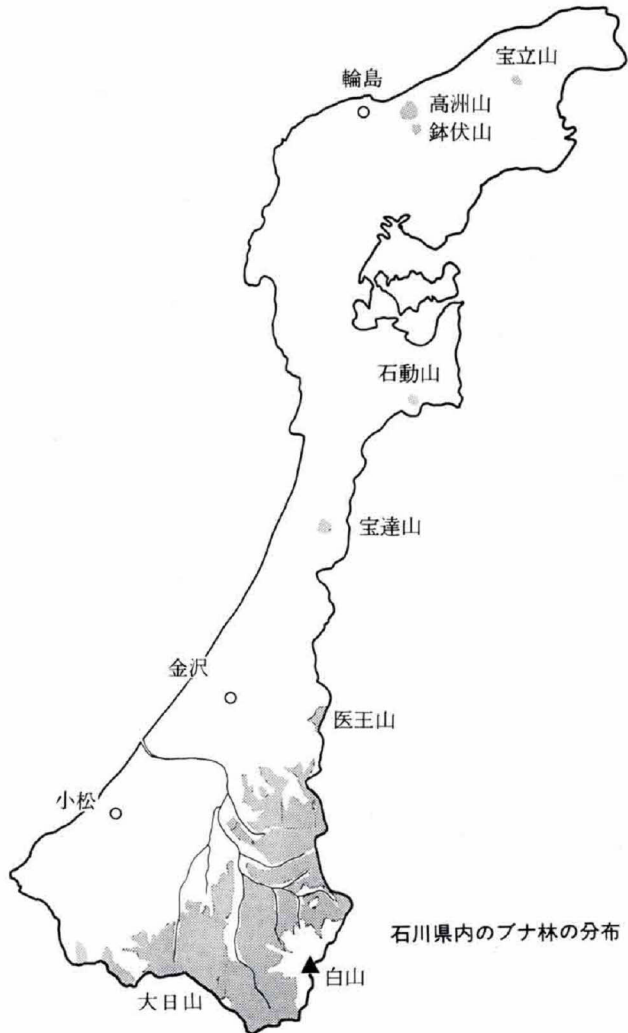
温帯の山地の肥よくな土壌によく生育するブナは、わが国では北海道の黒松内、長万部付近を北限として、本州、四国、九州に広く分布しています。本州北部や北海道では、低山や平地にも林をつくりますが、南に行くに従い分布の標高は高くなります。南限のブナ林としては、鹿児島県の高隈山(1237 m)の山頂のものが知られています。



ブナの分布 (HORIKAWA, 1977 より)

石川県のブナ林

もともとブナは山地に広く分布していましたが、現在では人間生活の影響を受けて限られた分布をしています。県内では白山地域が分布の中心で、この地域の植生の中で最も広い面積を占めています。しかし原生林として残っているのは、現在では標高1000mくらいから1600mくらいのところがほとんどです。他に医王山、大日山周辺、能登地域の宝達山、石動山、高洲山、宝立山などの山頂周辺のごく一部にブナ林が残っています。



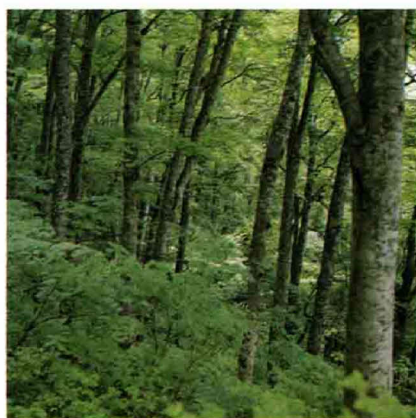
ブナ林の四季

落葉広葉樹であるブナは、春の芽ぶきに始まり、青葉の夏、紅葉の秋、そして葉を落した冬とそれぞれ変化をみせます。その林の中で、他の植物や動物もまた季節とともに変化してゆきます。四季それぞれの様相をみせるブナ林の生きものの生活をみることにしましょう。

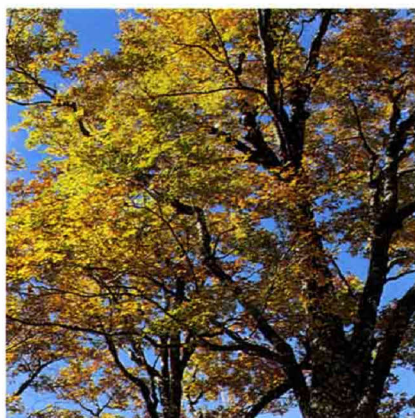
—春—



—夏—



—秋—



—冬—



〈春のブナ林〉

ブナがまだ芽吹く前の、ところどころに残雪のある早春の林の下では、カタクリ、ニリンソウ、キクザキイチリンソウ、イワウチワなどの草花がいっせいに咲いています。ブナが葉を広げてしまうと、林の中は太陽の光が十分には届かなくなります。そこでこれらの植物は、ブナが芽吹く前の短期間に葉を広げ、花を咲かせるのです。

林床の花が終わる頃、ブナは芽吹き、黄色の花をつけます。サルヤクマはこの花が好物で、花を求めて木に登ります。ブナは白山地域の山の林の中では、最も早く芽吹く木の一つです。その明るい黄緑色の若葉は遠くからでもよく目立ち、人々に春の訪れを知らせてくれます。

やがてブナが葉を広げる頃、林の中にキビタキやコルリなどの夏鳥が渡ってきます。



早春の花—カタクリ（上）
キクザキイチリンソウ（中）
イワウチワ（下）

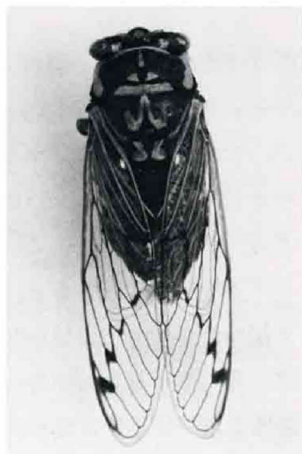
〈夏のブナ林〉

新葉からやがて青葉に変わる頃のブナ林は、林内の低木層も葉を広げ、林の中はしだいに明るさが減ってゆきます。この頃は多くの種類の鳥が巣を作り、雛を育てています。白山地域のブナ林ではコルリ、シジュウカラ、ヒガラなどの鳥の数が多いようです。また多くの昆虫類も活動しています。

鳥のさえずりが少なくなる6月後半から7月のブナ林では、エゾハルゼミが盛んに鳴いているのを耳にします。そして8月になると今度はコエゾゼミが入れ代って鳴き出します。

大きなブナ林にはコウモリもまた多くの種類が生活しており、樹洞などで子を育てています。テングコウモリ、カグヤコウモリ、シナノホオヒゲコウモリなどが白山のブナ林から記録されています。

太陽のひざしをうけ、ブナの枝先では実がどんどん成長してゆきます。実は夏に雨が多く降ればよく実り、少なすぎると空の実が多くできるといわれています。



コエゾゼミ



青葉を食べるブナアオシャチホコ

〈秋のブナ林〉

ブナ林の秋は、一年中で最もはなやかな季節です。ブナは黄色又は褐色に色づきますが、林内にはカエデ類やオオバクロモジ、ヤマウルシなど紅や黄に色づく葉が多く、みごとな紅葉の林となります。



ブナの実

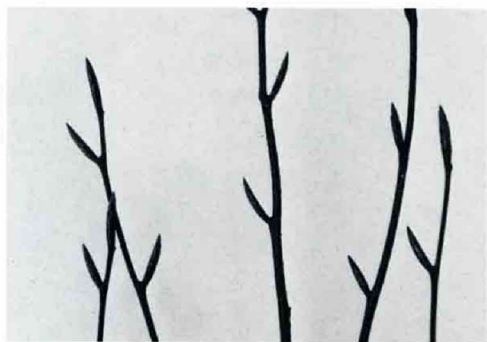
その中で、ナメコやブナハリタケ、 ツキヨタケなどのキノコが生えています。また熟したブナの実を求めて多くの動物が集まってきます。冬越しに備えて食いだめするクマやサル、そして巣穴に貯えるリスやネズミ類などがいます。原生林の中を行く中宮道やチブリ尾根の登山道沿いには、クマが登ってツメ跡を残したブナがよく見られます。



クマのツメ跡

〈冬のブナ林〉

葉を落とした冬のブナ林は明るく、枝を広げた白っぽいブナが空に向かって伸びているのがよく見えます。その枝先では、堅い鱗で被われたブナの冬芽が、吹雪や寒風から身を守りながら春を待っています。また深い雪の下は、直接寒風にさらされることのないので、比較的気温が高いものです。日本海側の多雪地に特有なヒメモチやエゾユズリハなどの常緑低木は、この雪に守られて冬を越します。また落葉の中にも、昆虫類など多くの生きものが冬越しをしています。一方、哺乳類の中でもヤマネやクマなど一部のものは冬眠しますが、多くは冬でも活動しています。雪の上に残された足跡が、彼らの存在を教えてくださいます。



ブナの冬芽

ブナを利用する生きものたち

ブナの原生林では、スギ林など人工林にはみられない複雑で、しかもバランスのとれた生きもの世界があります。そこには微細な土壌動物から大型哺乳類にいたるまで、数多くの種類がみられます。

新芽がふくらみ花が咲く春，葉がおい茂る夏，紅葉と落ち葉の舞う秋，そして葉がすっかり落ちて幹と枝が寒風にさらされる冬。移り変わっていく季節の中で、多くの生きものがブナを利用しています。花だけ，落ち葉だけを利用する生きものがある一方で、花や実や冬芽など四季を通じて利用するものもいます。またブナの樹幹を生活の場としているものや、樹洞を利用している生きものもいます。ブナの木の各部分をどのような生きものが利用しているのかをみることにしましょう。

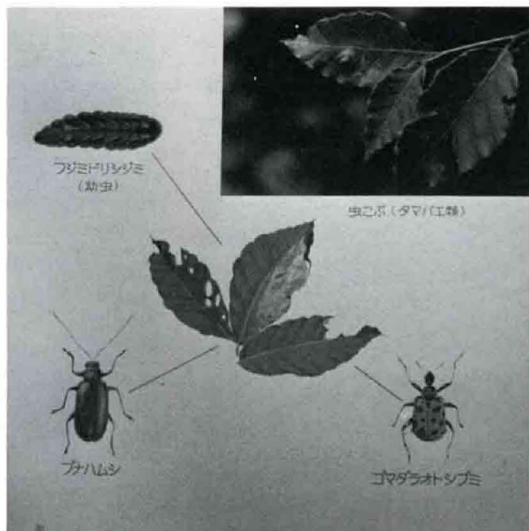
〈花・芽〉

春先のブナ林では、ふくらみ始めたブナの芽を、ウツやヒガラがついばんでいるのに会うことがあります。クマは、甘味のあるブナの花が好物で、花が咲き始めると木に登ってむさぼり食うといわれています。また蛇谷周辺のブナ林では、サルが群れで花を食べているのを見るのがよくあります。



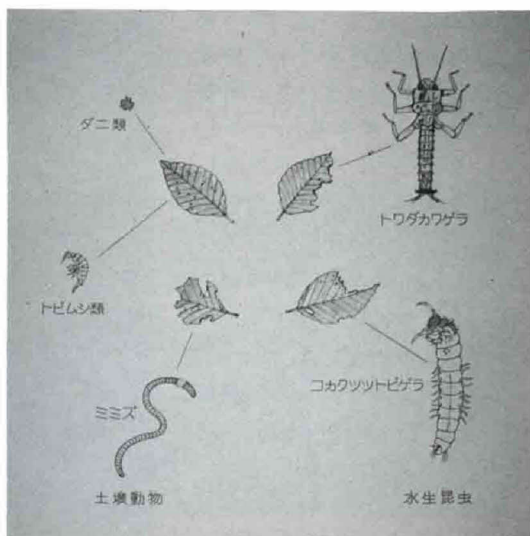
〈葉〉

ブナの葉を食べるのは、おもに昆虫類です。ゴマダラオトシブミなどのオトシブミ類の中には、ブナの葉を巻いて、その中に卵を産んで幼虫を育てるものがあります。またタマバエ類が卵を産んで虫こぶをつくりまします。チョウの仲間のフジミドリシジミの幼虫、ガの仲間のブナアオシャチホコの幼虫、ブナハムシの成虫と幼虫など、ブナの葉を専門に食べるものもいます。



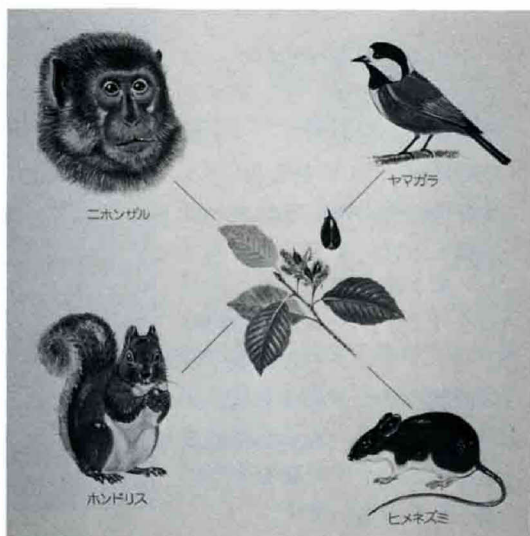
〈落葉〉

地上に落ちて枯れた葉は、ササラダニ類やトビムシ類、ミミズ類などの土壌動物と呼ばれるグループが、長い時間をかけて食べてゆきます。これらの動物は、落葉を土に変えてゆき、林の養分をつくるという大切な役割を持っているのです。また流れに入った落葉は、トワダカワゲラやカクツツビケラなどの水生昆虫の餌となります。



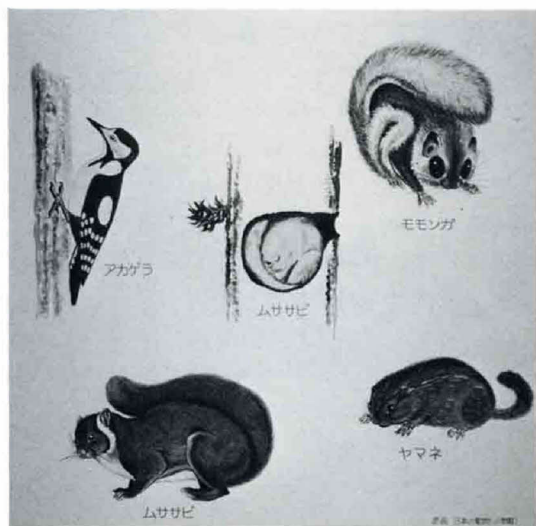
〈実〉

ブナの種子は栄養豊富で味もよいことから、多くの動物の餌となります。サルやリス、クマなどが実を求めて木に登ります。ヤマガラなどの鳥類にも、実を食べにくるものがあります。地上に落下した実は、その多くが虫に穴を開けられています。ヒメネズミも、落ちた実を食べたり、ねぐらに運んで貯えたりします。ブナの実は、冬を迎える動物たちの重要な食料となっているのです。



〈樹洞〉

樹木が成長すると、やがて内部に空洞ができたり、樹皮がはがれてすきまができたり、鳥がつついて穴をあけたりします。そのような穴をヒガラやゴジュウカラ、キツキの仲間、フクロウの仲間などの鳥が巣に使います。またムササビやモモンガ、コウモリの仲間が、巣やねぐらに利用したり、ヤマネが冬眠に利用したりします。



〈樹幹〉

ブナの幹は、様々な動物の生活の場となるだけでなく、いくつかの植物にとっても重要な生活の場となっています。

なかでも特に多いのは、コケ類や地衣類などの着生植物です。ブナの幹は、もともと白っぽくなめらかなのですが、ほとんどの木は着生植物により、様々な模様をつくっています。コケ類にはチャボスズゴケ、オオギボウシゴケモドキなどがあり、地衣類にはアンチゴケ、トコブシゴケなどがあります。また種類は少ないが、ミヤマノキシノブなどシダ類も着生するものがあります。

種子植物の中では、寄生植物であるヤドリギがよくブナについています。ヤドリギの実は、キレンジャクなどの鳥の餌になるのですが、非常に粘り気があり、よく幹にひっつき、そこから分布を広げてゆきます。

ブナ林ではキノコ類がきわめて豊富です。ブナの主に枯れ木に生えるキノコには、食用になるナメコ、ムキタケ、ブナハリタケなどがあります。またツリガネタケなどのサルノコシカケと呼ばれるものや、毒キノコであるツキヨタケなどもよくみられる種類です。



地衣類、コケ類の着生



ヤドリギ



サルノコシカケ

ブナ帯の人間生活

日本の冷温帯落葉広葉樹林の大部分は、もともとブナが生育していたところか、現在ブナ林になっているところで、この地域を「ブナ帯」と総称しています。ブナ帯では、ブナをはじめミズナラ・トチ・クルミ類等の落葉広葉樹が豊富なこと、気候が冷涼なこと、比較的平地が少ないことなどの特性があるので、他の地域と異なる生活文化がみられます。白山ろくでは、大体標高400 m以上の集落で、かつてブナ帯の生活文化がみられました。

ブナ帯の代表的な生活文化としては、焼畑・出作り生活、木工業、集落形態等があります。これらの生活文化に共通するのは、ブナ帯の自然環境（地形、気候、植生）に極めて適応していることです。平野部の米作地帯に比べて、ブナ帯山村の生活の厳しさは容易に想像がつくと思いますが、そうした環境の中で人々が生きていくために産みだされたのがブナ帯生活文化です。

こうした生活文化は、地域住民の生活に深く根ざした、いわば伝統的な文化形態といえますが、高度経済成長以後すっかり変貌してしまいました。かつて製炭や養蚕で現金収入を得ていたブナ帯山村は、今ではリゾート観光地に変わったり、公共事業を推進したりすることによって、過疎化に歯止めをかけようとしています。このようなブナ帯生活文化の変容は、今後も続くものと思われます。

一口メモ

森の母・森の医者

イギリスでは森林樹木の種類が少なく、ブナはナラに次ぐ有用樹とされています。ナラの男性美に対して、ブナは樹相が女性的で優美なところから、The Mother of Forest（森の母）とよばれています。

また一方では、ブナの落葉が林地の土壌を肥やし、下木の成長を助けるので、これを人称化して、The Doctor of Forest（森の医者）とも言われています。

〈焼畑と出作り〉

一般に、平地が少なく地形が急峻な地域では、米作のかわりに焼畑耕作により穀類を得ていた例を多く見かけます。ブナ帯の中でも、地形や気候の関係で米作が困難な白峰村や尾口村の一部では、かつては盛んに焼畑が行なわれていました。

焼畑は、山腹斜面の樹木を伐採し焼却して土壤に養分を与えることにより、作物を栽培する農業で、極めて原初的な生産形態と言えます。焼畑では主として、ヒエ・アワ・ダイズ・アズキ・ソバ等の穀類と大根・赤カブ等の根菜類が栽培されていました。これらの作物は、冷涼で早く霜が降るために農業生産性が限られているというブナ帯の自然条件のもとでは、最も栽培に適していたと言えます。

焼畑に適した山腹斜面は、一般に本村から離れている場合が多く、人々は焼畑地の近くに出作り小屋を建てて、焼畑耕作に従事しました。こうした出作り生活では、主食の穀類は焼畑により得ていましたが、それ以外の栄養源は主として周辺の動植物から摂取されていました。クマ・ウサギ・川魚等の動物やキノコ・山菜・堅果類等の植物が豊富で、住民の貴重な栄養源となっていました。物資の購入に必要な現金収入は製炭や養蚕から得ていました。

こうした生活形態も最近ではほとんど見られなくなりました。



出作り小屋（白峰村奇原）



焼畑（鳥越村、大日川上流）

〈木工業の変遷〉

落葉広葉樹が豊富なブナ帯では、古くから木地師と呼ばれる移動職能集団により、木地製品（椀・膳・盆・鉢など）が作られてきました。主にブナ・ミズナラ・トチなどを使って製品に加工されましたが、これにはかなり高度の技術を要しました。

一方、ブナ帯の定着住民の間でも冬季の現金収入源として木材加工がおこりました。ここでは、木地製品ほどは高等技術を要しない杓子やコスキ（コシキ）が製造されました。

これらの木工業も近年では、あるものは衰退し、あるものは機械化されたりして、かつてのブナ帯の生活文化とは程遠い姿になっています。



木地椀作り

〈里山のブナ林〉

ブナ帯の厳しい自然条件のもとで人間が生きていくには、多くの生活の知恵が必要となります。集落の裏山の樹木が伐採されないで、保存されているのも、そうした生活の知恵の一つです。

一般に平地が少ないブナ帯では、山腹斜面のすぐ下の平坦部に集落が立地しているのをよく見かけます。こうした集落では、山崩れ・雪崩・洪水等から人家を守るために、裏山の樹木が残されています。仮にブナ林を伐採して他の樹木を人工造林したとすると、前述の災害を防止する機能が低下するので、土壌・林相が安定している天然林が残されているわけです。手取川上流域の鳥越村仏師ヶ野、尾口村東荒谷などの裏山に、こうしたブナ林がみられます。



里山のブナ林（鳥越村仏師ヶ野）

〈ブナ材の用途〉

ブナ材の利用形態は時代の流れとともに大きく移り変わってきました。第二次大戦前・戦中・戦後の社会経済情勢の変化が、ブナの利用形態にも大きく反映されてきました。

第二次大戦前には、ブナは主として生活用具に利用されていました。当時ブナがあまり利用されなかったのは、狂いが大きく腐り易いという材質を克服するだけの技術が開発されておらず、又、伐採運搬が困難で搬出に多額の費用がかかったためです。このため、山間部の農家の副業として、杓子、鋏の柄、天秤棒、雪怪（コスギ）や、木地師により丸物漆器木地が作られたりしました。ブナ材の製材・加工については、大正・昭和にかけて全国にいくつか工場ができましたが、本格的な製材・加工は戦後になってからのことです。

戦時中は、あらゆる物資が軍需材に使われましたがブナも例外ではなく、航空機用単合板に利用されました。水上機のフロート、燃料タンク、プロペラ等にブナが使われました。

戦後は、ブナの利用と需要が飛躍的に増大しましたが、この背景には奥地林の開発、原木搬出の迅速化、防腐・乾燥処理技術の向上、加工技術の進歩等があります。このため、ブナ製の合板、積層材、フローリング材、曲木家具、鉄道枕木、パルプ原料、楽器等の製品が多量に作られるようになりました。別の見方をすれば、日本経済の発展が、それまで未発達分野でブナを利用することを促進したとも言えます。

一口メモ

ブナを漢字で書くと

ブナを漢字で書くと、山毛榉、武奈、掬、樞といった書き方があります。このうち面白いのは「樞」です。木へんに無しということから、ブナは「木でない」木と考えられていたことがわかります。ブナは、かつては利用価値が低く、その上、他の木に比べて奥山にあり、大木のため重量があるので搬出が困難であったところから、「樞」という漢字が使われたものと思われる。

ところが、戦後になってからブナの需要が増大した結果、「栴」・「楨」といった漢字をブナと読ませる意見ができました。樞から栴・楨への変遷は、ブナの利用価値が高まったことを物語っています。

〈ブナ帯の開発〉

高度経済成長の波が全国各地に浸透し始めた1960年代以後、ブナ帯の伝統的生活形態は変容しました。それまで主要な現金収入源であった製炭業は、燃料革命のために全く衰え、多くの人達が新たな生活を求めて都市部へ流出し始め、過疎化が始まりました。又、山村に残った人々も生活水準の向上を目指して、従来とは異なる生産手段により収入を得ようとしてきました。この結果、過疎化を防止し、更に現金収入を得るための産業構造がブナ帯山村に見られるようになりました。それが、観光産業と造林事業です。

ブナ帯山村は一般に、冬季の積雪と夏期の冷涼さに特徴がありますが、これを生かしてスキー場と別荘地の開発が、折からのレジャーブームに乗って、盛んに各地で行なわれました。特にスキー場の開発は、1960年代以後本州では多くのブナ帯山村で行なわれ、スキー場の付属施設や宿泊施設は、地元住民に雇用口を提供しました。白山ろくの鳥越・尾口・白峰各村のスキー場もこの部類にはいります。

造林事業もまたブナ帯住民に雇用口を提供しました。造林事業は一般に、天然の広葉樹（ブナ・ミズナラ・トチ等）を伐採して、針葉樹の人工植林を行なうわけですが、雇用口を提供する一方で、自然の生態系を破壊するという影響が大きく、最近の自然保護論争の原因となっています。

伝統的生活形態の変容と自然生態系の破壊という二つの点に、過疎地のブナ帯山村の抱える問題が集約されていると言えます。

一口メモ

ブナの花ことば

ブナの花ことばは、「繁栄」を意味します。ブナの林相は優美にして荘重で、季節ごとの色彩の変化は華やかです。冬の枯枝が、春には鮮やかな新緑にかわり、夏には濃緑色となり、秋の紅葉期には美しい黄橙色になるさまは、ブナが季節ごとに豊かになっていく印象を与えます。

こうしたブナの姿は、いかにも「繁栄」という言葉にふさわしいと言えます。

ブナ林の保護

これまでに見てきたように、ブナ林は、その中に多くの動物を育て、住み場を提供し、また四季おりおりの美しさを見せるなど、豊かな白山の自然の象徴です。白山国立公園には、人の住んでいる地域や荒れ山には見られないクマ、サル、イヌワシなどが多いのも、広いブナ原生林が残されているからです。

白山及びそこに源を発する川の流域に生活する人々にとっては、白山で最も大きな面積を占めるブナ林は、木材資源を提供してくれるだけでなく、その他多くの森林としての機能を果たしてくれていることにも目を向けなければなりません。雪の多い白山では集落や道路を守る雪崩防止の林として、また根が地表を保護するので崩壊地の多い山では土砂流出防止の林として大切です。そして深い森林は雨水を貯え、水源かん養の役目を果たしています。

ブナの木は成長に長い年月を要します。白山の風雪に耐えぬいたブナの太木は、年輪からみると200年から300年を経ています。つまり一旦ブナの原生林を切ると、伐採跡地ではすぐには生えにくい木ですから、再びその山がブナ林となるには数百年かかるということになります。

白山ろくでブナ林の見られるのは、標高400mくらいの谷間の集落の裏山にある雪崩防備林から、上限は亜高山帯へ移る手前の1600mくらいまでです。その地帯でも、林道が入っている山や、古くから炭焼や焼畑耕作をした山では、ほとんどがミズナラを主とする二次林になっています。また奥地の急傾斜地では、雪の影響も加わって森林は十分に発達せず、大きな広がりブナ原生林は限られた場所にしか残されていません。

おわんを伏せたような円い樹冠と、白く太い樹幹のつらなるブナの古木の林は目を楽しませてくれ、国立公園や自然休養林等、レクリエーションや自然観察の場としても欠かせません。

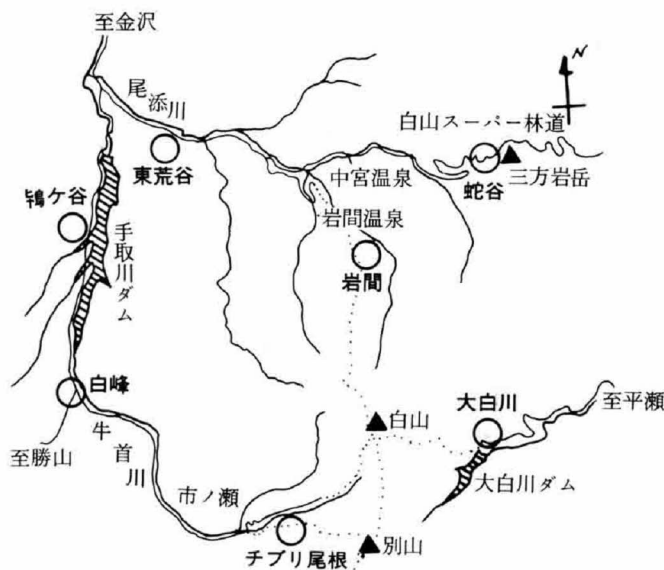
このようにブナ林は、さまざまな機能をもって私たちに役立っていると同時に、国民の財産としても価値の高いものといえましょう。白山のブナ原生林を守ることは、白山の自然全体を美しく豊かに保存することなのです。ブナ林を守り育てることは、私たち皆が考えなければならないことではないでしょうか。

ブナ林へ出かけよう

今までブナ林の自然と、ブナ林と人間生活のかかわりについてみてきましたが、実際にブナ林へ出かけていく時の参考にさせていただくために、白山地域のブナ林のいくつかを図に表わしました。ここでは登山道や車道などの近くで、比較的観察しやすいところだけを示しました。これらのブナ林は2つのタイプに分けられます。1つはほとんど人の手の加わっていない原生林であり、他の1つは大きなブナが残っているものの、かつては人の手の加わったことのある林です。後者のタイプは、いずれも集落の裏山に残っているものです。豪雪から家々を守るため、雪崩防備林として残されてきたブナ林です。

東荒谷 尾添川左岸の急斜面のブナ林。集落の手前のスノーシェッドを出たところより、コンクリートの階段が登っています。

鴉ヶ谷 手取川ダム左岸の国道157号線の鴉ヶ谷トンネルの上方に広がるブナ林。集落跡より歩道があります。



白峰 林西寺の裏より歩道があります。登り切ると忠魂碑があり、白山の展望台にもなっています。

岩間 新岩間温泉より歩いて1時間余り。岩間ヒュッテより特別天然記念物の岩間噴泉塔へ向う歩道沿いの林。

テブリ尾根 市ノ瀬から歩いて約30分。別山への登山道沿いの林。白山の石川県側を代表する大規模な原生林の一つです。

大白川 大白川ダム近くの平坦な場所に広がるブナ林。キャンプ場が林の中に作られており、名瀑白水の滝が近くににあります。

蛇谷 白山スーパー林道沿いのブナ林です。主に第2ヘアピンより上方に林をつくっています。特にフクベ谷対岸のものは大きな広がりをもっています。

あ と が き

ブナという木は、今では山奥にしか林をつくっていません。また近年まで、その材はスギやヒノキなどの他の木にくらべると用途も限られていました。そのため一般の人には、あまりなじみのない木であったでしょう。しかし最近では、家具材などとして広く利用され、また原生林の伐採問題などでよく耳にするようになりました。そこでブナとはどのような木であるのか、また白山を代表するブナ林では、どのような生きものが生活しており、どのような人々の生活があったのかを知っていただくために、この小冊子を作りました。

ブナ林について少しでも知っていただき、その重要性を考えていただけるなら、さらにこの機会に実際にブナ林の自然観察に出かける方ができるなら幸いです。

白山の自然誌2

ブナ林の自然

発行日 1981年9月21日

編集発行 石川県白山自然保護センター

石川県石川郡吉野谷村中宮

TEL 076196-7111

印刷 橋本確文堂

